ルーヴル美術館

岩波写真文庫　206

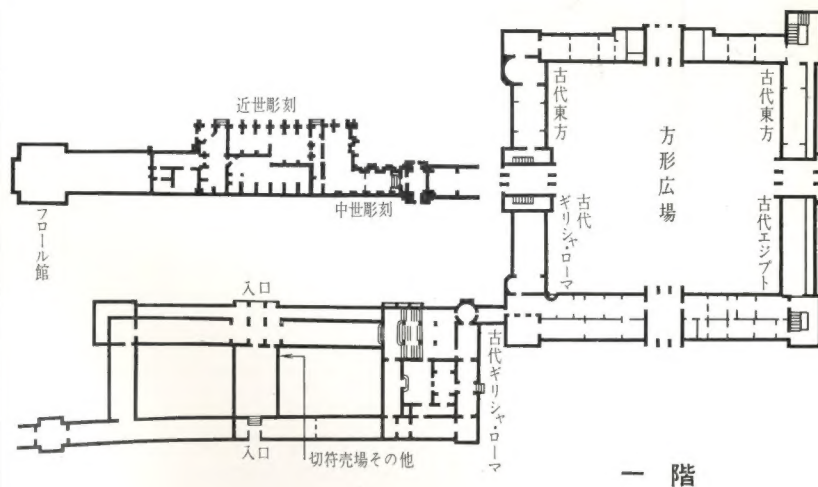
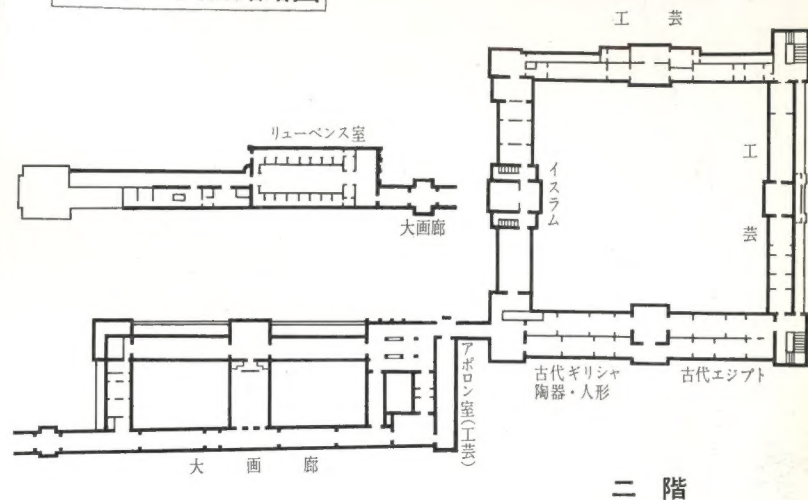
ルーヴル美術館
206

入口

岩波写真文庫 206

ルーヴル美術館

編集　岩波書店編集部
監修　柳　宗玄
写真　飯島一次　高階秀爾
　　　柳　宗玄

美術の国といえばフランス、美術の都といえばパリ、そして美術館といえばルーヴルを誰しもまず思うだろう。実際はヨーロッパの他の国々とそれほどの差があるとは思われないが、ともかくフランスが美術の国であるには間違いない。パリやその他の町々を歩いても、公園や目抜きの並木通りだけでなく、貧しい裏通りにも何か一種の美しさが漂い、町を歩く人々の普段着にも感覚のよさが感じられる。この国には美術館と呼ばれるもの——その中には歴史、考古学、民俗学関係のものも含まれるが——が全国で千近くあり、パリだけでも約八十を数えるという。この他にも中世の教会や近世の王宮・城館などで、それ自体立派な美術館として大切に保存されているものの数は非常なものである。これは、フランス人が如何に過去の遺宝を貴び、美術を愛し、伝統と創造の意味を理解しているかを証明するものだろう。その愛と理解の最大の結晶が、ルーヴル美術館に他ならない。

目次

定価100円　1956年11月25日第1刷発行　1959年11月30日第2刷発行　発行者 岩波雄二郎　印刷者 米屋勇　印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社　製本所 永井製本所　発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

ルーヴル美術館略図

工芸
リューベンス室
大画廊
イスラム
工芸
アポロン室(工芸)
古代ギリシャ陶器・人形
古代エジプト
大画廊

二階

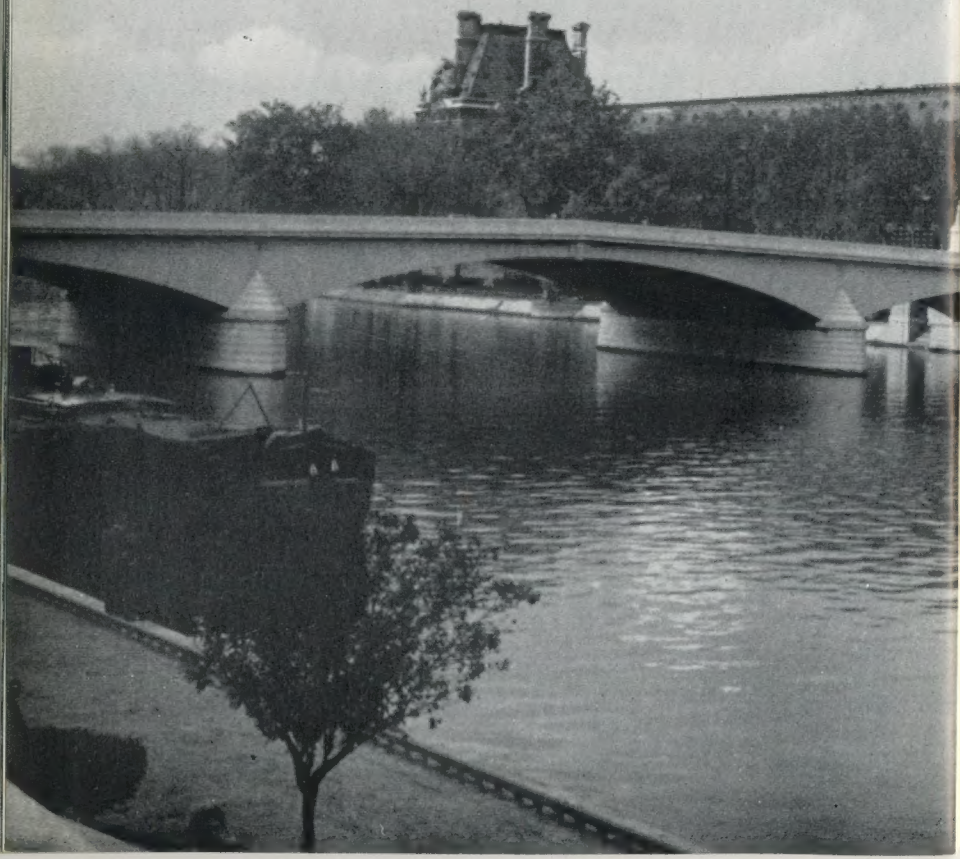
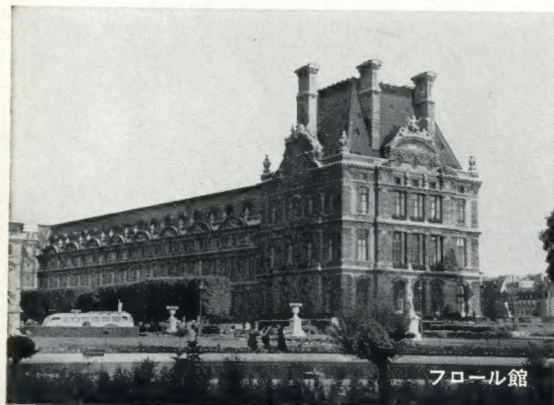
近世彫刻
中世彫刻
フロール館
古代東方
方形広場
古代東方
古代ギリシャ・ローマ
古代エジプト
入口
入口
切符売場その他
古代ギリシャ・ローマ

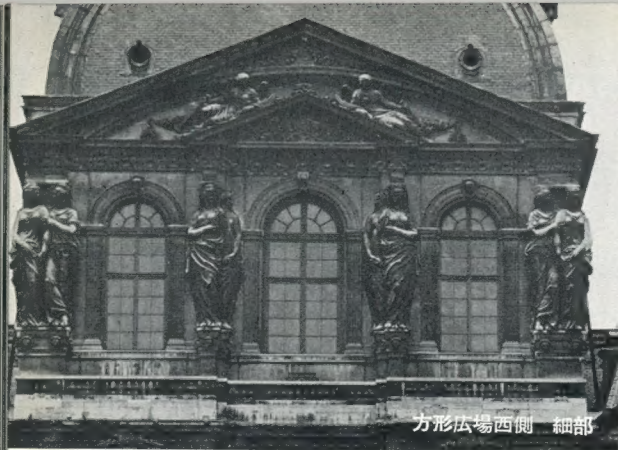
一階

美しいものを愛し美しい品を集めようとする欲望は人間の本能に属する。西洋では既にギリシャの時代から美術品の蒐集家なるものがいた。中世以来の君公貴族はいずれも美術品を集め楽しみ、教会もまた貴重な宝物を大切に保蔵するのが常だった。しかし美しい品々を特別な建物——美術館——に集め並べ、これを大衆に公開するようになったのは、十八世紀後半のことである。ルーヴルは美術館として世界最古というわけではない。フランス革命を機としたその公開は一七九三年のことである。しかし陳列美術品は旧ルイ王室の蒐集品を主体にしたわけで、厳密にいえば、ルーヴル美術館の所蔵品の蒐集は更に遡って、美術の父といわれたフランソワ一世によって始められたといえる。たとえば今日我々の親しんでいるレオナルドやラファエルロの代表的作品は彼が集めたものである。そしてその後四世紀余りにわたる公私の努力が、今日の大美術館を築きあげたのである。その収蔵品は人類の主要文化のほとんどすべてに関し(但し東洋美術は近年ギメ美術館に移管)、我々はここに人類文化史の華麗な粋を見ることができる。

セーヌ対岸より

カルゼェル門

ルーヴル宮・北側面

東側面

フロール館

ルーヴル美術館は、その建物自体が建築史上重要である点にまず特色がある。パレ・デュ・ルーヴルと呼ばれるその名でわかるように、元来これは王宮であった。しかもその規模が桁外れに大きいことから想像されるように、長年月にわたって建て増されたものなのである。起源は古く中世に遡る。十字軍時代の国王フィリップ・オーギュストがパリ右岸を防備するためにまず城壁を築いた。そのときこの土地はル・ルーヴルと呼ばれていたというがその名の語源は明らかでない。その時代の痕跡は今はない。その後十六世紀に入ってフランソワ一世がそれを王宮に改め、続いてアンリ二世がその改造拡張を続けた。工事の担当者は当時の建築界の第一人者ピエール・レスコォで、有名な彫刻家ジャン・グジョンが装飾を担当した。その後のルーヴルは王家と明暗の運命を共にしながら拡張され続け、特に十七世紀にはジャック・ルメルスィエ、ル・ヴォ、クロード・ペロー等の活動で面目を一新し、その後十九世紀まで重要な工事が続いた。美術館は王宮全部を占めているのではなく、北側の長い部分には大蔵省や装飾美術館が陣取っている。

方形広場西側　細部

東側面　入口上部

方形広場西側　細部

フロール館

美術館の中へ入る前に、一応建築の細部を見る。十六世紀から十九世紀にかけての建築なので、大体が古典趣味である。いたるところにギリシャ風の縦溝をつけた柱やコリント様式の柱頭、古代神話の神々やキューピッドなどの浮彫が見られ、繊細な装飾模様や艶麗な裸女像が華やかに色をそえる。これが近代フランス美術の理想だったのだろう。このような古典趣味を誇らしげに説明してくれるフランス人もいるが、顔をしかめて横を向く者も少くない。

同　左

時計館・細部

ルーヴル学院　細部

サモトラケのニケ　前4世紀末

入ってすぐ東側に古代石棺やブロンズ像が並び、その奥の階段上にサモトラケのニケ像が光を浴びて颯爽と立ち鮮かな演出効果を見せる。二階へ上ると絵画室だが、横の階段を下りた奥には古代ギリシャ・ローマ彫刻室が三十近くも続く。一般に採光がうまく陳列は立体的で気持がよい。

花を讃える／前6世紀初頭

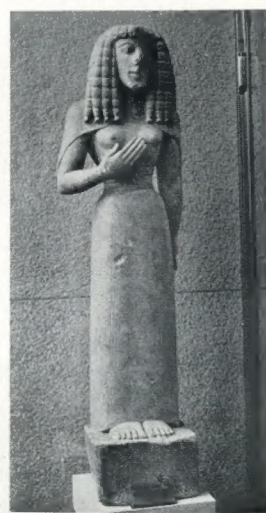
ヘルメス　前5世紀初頭

中へ入るのはふつう中央のドゥノン館からである。入場料は五十法(五十円)、学生、軍人、多人数の家族は半額、写真をとりたければ五十法足せばよい。入場無料日(日曜)があるのはいい制度だ。夕方は五時に閉館だが、毎週金曜日の夜には「夜のルーヴル」と称して彫刻室の一部に特別照明を施しダイナミックな見せ方をして見物人を喜ばせる。

スフィンクス室

騎士像頭部　前550年～520年

ヘルメスに従う女　前5世紀初頭

その長々と続き拡がる数多い陳列室の中で最も注目されるのは一番古いアルカイック室だ。ここでは紀元前七世紀から五世紀初頭にいたるプリミティフな様式の彫刻がさまざまのポーズをとって並び、そのすべてに新しい芸術創造の意欲に胸を一杯に膨らませていたギリシャ民族の若々しさが感じられる。一時はこの様式にはクラシック様式の前段階としての意味しか与えられなかった。しかし今日ではここにおいてこそ造形の問題がその本質に遡って考えられていることが理解されている。

女子像　前7世紀末

サモスのヘラ　前6世紀後半

アテナ　頭部　前5世紀中頃

青年像　頭部　前6世紀

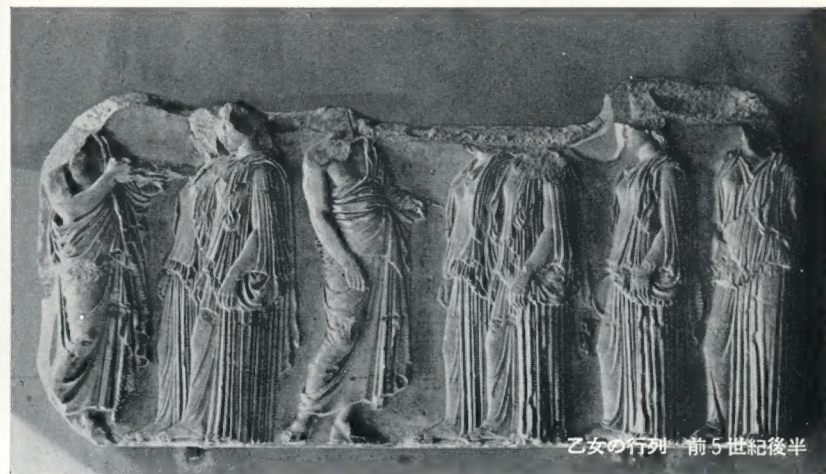
アルカイック彫刻室

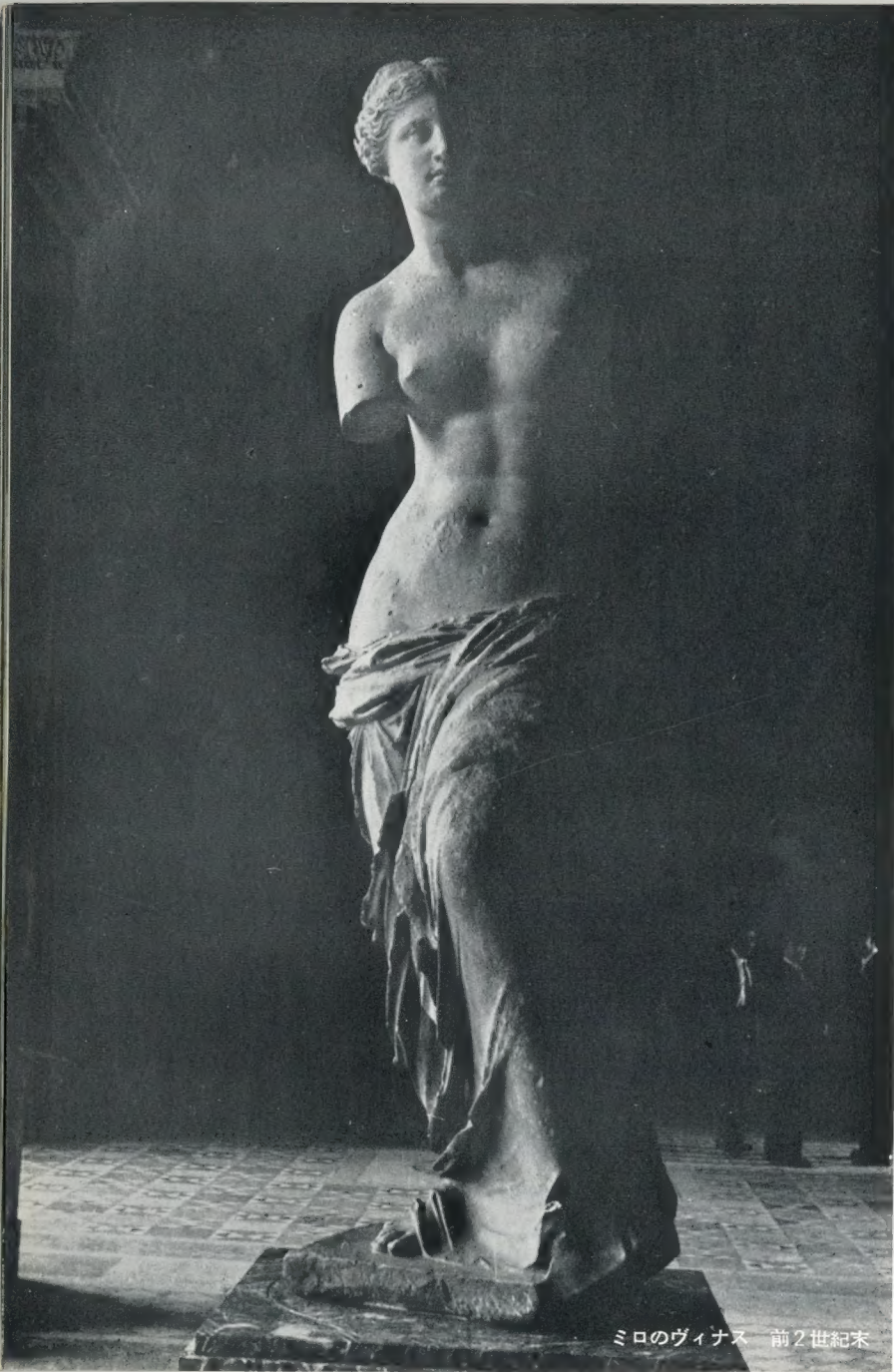
乙女の行列　前5世紀後半

サイレン　前4世紀

アフロディテ　前440年頃(模作)

青年像　頭部　前5世紀後半

クニドスのアフロディテ　頭部
前4世紀(模作)

オルフェウスその他　前5世紀末(模作)

さらに東奥へ進むと、パルテノン室以下クラシック様式の彫刻を並べた室が続く。アルカイック彫刻に見慣れてきた目には、前五世紀から四世紀にかけての自然主義への傾向がここで極めて明瞭に観察される。この時期のギリシャ人の知的な自然観察と理想美への憧憬が生みだしたものが古典様式なのだ。側光を受けて一きわ冴えるパルテノンの浮彫の名作「乙女の行列」から、あまり人目をひかぬ小品(たとえば右頁右下の裸体像)にいたるまでに見られるこの様式の性格は最も普遍的である。そのゆえにこそ、ローマ時代に、ルネッサンスに、近世フランスに、幾度となく甦えったのだ。

スフィンクス室

クラシック彫刻室北側の奥に、独り艶麗な姿を見せて高い台の上に立っているのはミロのヴィナスだ。幾つもの室を突抜けて遠くから見えるようになっているので、それらの室を素通りしてこの像に吸い寄せられてゆく人が少くない。これを見て、ルーヴルへ来た目的を一つ達したと満足する人も多いのだろう。なるほど見事な彫刻だ。豊満ながら引締った裸体（たとえば四六頁のリューベンス筆の裸体と比較）、体をくねらせながらもなお失わぬ気品は、クラシック彫刻の伝統のおかげだろう。しかしはたして名ほどの実力があるかどうか。このヴィナスに続くヘレニスティック様式の彫刻は、次第に感情表現のために知的節度を失っていく。ローマ時代のものは、数ばかり多くて内的生命が涸渇しているように思える。

うずくまるヴィナス　前３世紀（模作）

カリヤティッド室

ミロのヴィナス　前２世紀末

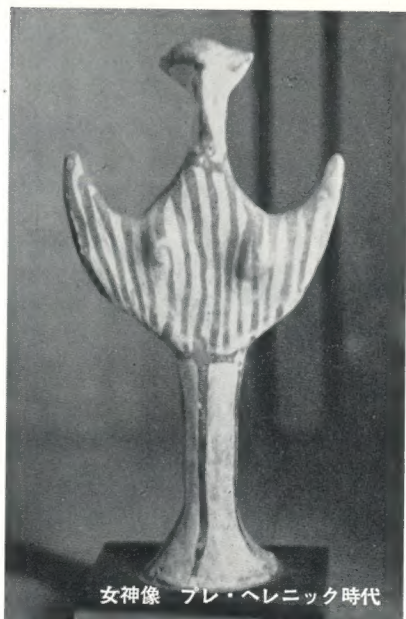
ミロの陶板　クラシック時代

テラコッタ群像　前2千年紀初頭

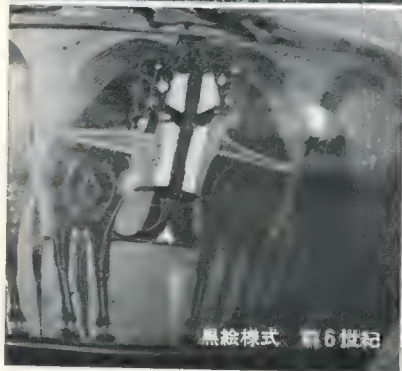
タナグラ人形　クラシック末期

レダ　ヘレニスティック時代

エレクトラとオレステス　クラシック時代

母神像　前1900年～1700年

女神像　プレ・ヘレニック時代

ギリシャ彫刻を見たあと、その真上の二階にある同じ時代のテラ・コッタ(素焼人形)および陶器室を訪れる(二階には他にブロンズ像や宝石細工などもある)。部屋数は十ほどだが、そこに並んだ作品の数は驚くべきものだ。陶器(土器)類とテラ・コッタは必ずしも判然と区別されて並んではいないが、テラ・コッタから先に見てゆくと、まずプレヘレニック時代(紀元前第三千—二千年紀)の土の中からそのままひねりだしたような単純な人形が目を引く。写実技巧が進んだ時代の作品よりも、こういった原始的な作品に、作者の造形意思がより直接に感じられる。人形はクラシック時代からとくに数多くなる。これらは神や死者への供物、玩具、家具などの装飾(ミロの陶板など)として作られたものだが、このような日常的な小品でも、それぞれの時代の大芸術の様式を忠実に反映しているのだから面白い。しかも、表現はもっと自由で変化がある。こういうものを一つ自分の机の上においていたらさぞ楽しいことだろう。

ミリナ室

アンフォラ　前8世紀

アンフォラ

壺を見る。これも非常な数だ。特に多いのはいわゆる黒絵様式(前六五〇—五〇〇頃)と赤絵様式(前六世紀末—五世紀)だ。これらの様式に属する壺は、まずその形を見ると、いずれも頗る整ってはいるが、その感じは固く冷たく生気に乏しい。ある学者の説明によると、それはこの種の壺の形が完全な幾何学的精密性を保っているからだそうだ。なるほどもっと古いものは、形は幾何学的には不完全だが、何となくおっとりとして温か味がある。こういう古いものを幾何学様式(前十—八世紀)と呼ぶのは矛盾しているようだが、この場合の幾何学とは絵に関しているのだ。つまり人物や鳥獣植物などを甚だ抽象的に表現しているのでそう呼ぶのである。これらの絵は甚だ原始的だが、最も現代的なものと共通した何かがありはしないか。後期になって壺の形の方が幾何学的になると絵は逆にリアルになる。しかしその大部分はアルカイック時代なので、絵は自由で中々うまい。また神話や風俗の描写もそれとして大いに興味をそそる。

アンドキ　前6世紀末

オイノコエ　前7世紀

オイノコエ

東方風様式　前7世紀

黒絵様式　前6世紀

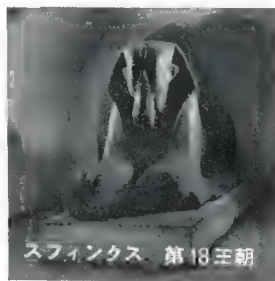
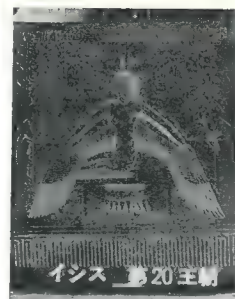
黒絵様式　前6世紀

ホルス　サイス時代

古代エジプトの室に移る。エジプトのものも一階と二階に分れているが、主なものは一階にあり、二階には彫刻の小品や工芸品が並んでいる。一階の陳列室は古代ギリシャ彫刻室の東奥にあるが、別に方形広場東側の中央に入口があって、外からも直接に入れるようになっている。

ルーヴル美術館は十九世紀の初頭からエジプト学が発達したフランスの中央の美術館だけあって、古代エジプト美術のコレクションは見事なものだ。エジプトの象形文字を最初に解読したシャンポリヨンも一時ここの管理委員になり、彼の努力で少なからぬ傑作品が加わったという。南側は明るくて陳列は甚だうまい。東側にある新王国の大陳列室は、いささか暗いが、巨大な空間をたっぷり使っており、気持がよい。もともとこれらの室はルイ王朝様式であるわけだが、古代エジプトという異質文化に属する美術品の陳列のために、それを巧みに改装したのだ。大変な苦心だったに違いない。そして我々がこれらの室へ入ると、全く現代離れのした異様な古代アフリカ文化の雰囲気の中にいきなり完全に包まれてしまう。

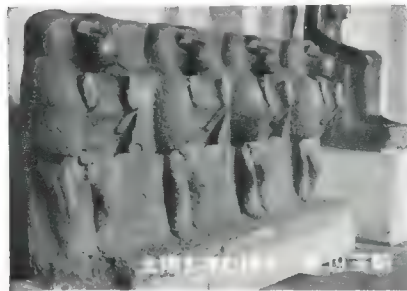
スフィンクス　第18王朝

ィス四世
第18王朝

イシス 第20王朝

怪異なポーズをした宗教像が並ぶ。厳然として無表情の国王像が立つ。解読し得ぬそれらのポーズや顔付きの奥に、我々のとうてい近寄り得ぬ何ものかがある。頑として動かぬ強い力だ。足先の断片一つにもその力が充満している。古代エジプトの美術はやはり大変なものと思う。丸彫像と比較して低浮彫の方はもう少し気軽に楽しめる。こちらには物語の描写が多いが、ギリシャの浮彫とはまた別の透明な美しさだ。その美しさが最大限に発揮されるように陳列にも苦心のあとがうかがわれる。

ギリシャ・ローマの美術は一直線の様式発展を示したが、三千年にもわたってナイル河畔に花咲いたエジプト美術は、いわば円環的様式発展をしたように思える。しかもその円環には幅があり、宗教的宮廷的美術の他に庶民的美術もかなり大きな部分を占めていたようだ。前頁の「蓮をもつ女」など、じっと見ているとまことに楽しい。長い蓮の茎に似た女の優美な体に、一本の花を愛でる可憐な心が美しく映っている(この彫刻は正確にいうと沈み彫—凹面彫刻であり、浮彫にはみられぬ独特の美しい線を描きだしている)。庶民の生活はマスタバ室に移転復元されているアクフトホテップのマスタバ(貴族の墓室)内部の浮彫によく見られるのだが、その撮影は甚だ困難でここには紹介できなかった。エジプト彫刻では動物彫刻もすばらしい。ルーヴルにはこの種のものに猫、犬、狒々などがあり、いずれも非常にリアルでありながら神秘的な強い力に満ちている。

捧げ物をもつ女　第12王朝

死者の遊覧船　中王国

古代東方(メソポタミヤ)美術は、方形広場の北側全部と東西両側の北半分を大きくコの字型に占領している。このコレクションは、その量と質において世界一だろう。しかも、陳列方法も見事に近代化され、現地の地図や風景写真なども適当に配されて、ルーヴルで最も気持のよい陳列室になっている。エジプト室から地下階段をくぐりぬけてここへ来ると雰囲気ががらりと変る。戦いや狩猟など、猛々しい場面の描写ばかりだ。

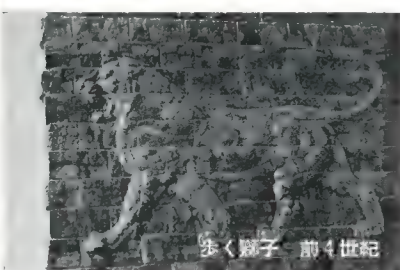
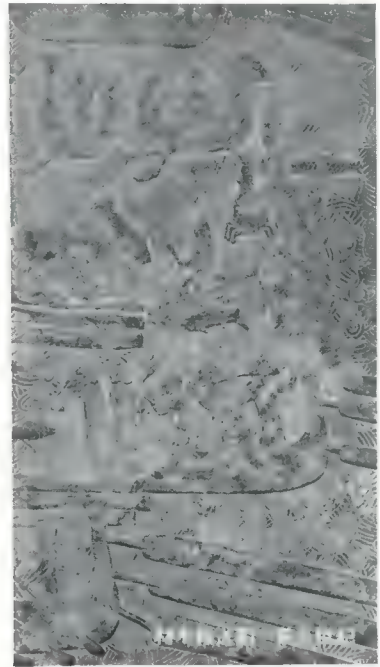
青年像頭部　前8世紀

女子像　前24世紀

第二アッシリア室

ここも歴史は長い。今日はひどく荒廃した両河地方に、紀元前四千年以来、種々な民族が興亡しつつ人類文化を築きあげたその歴史の変遷を、我々はここで如実に見ることができる。前二千年代のスメル族のもの(二六頁上)には異常な迫力があり、前十―七世紀のアッシリヤ朝のもの(二六頁下、二七頁、右頁下)は力強いままに洗練されている。小アジヤのヒッタイト族の作品(右頁上)は何となくひなびているが、アケメネス朝ペルシャ(本頁)の釉のついた壁の装飾は実に豪華だ。

歩く獅子　前4世紀

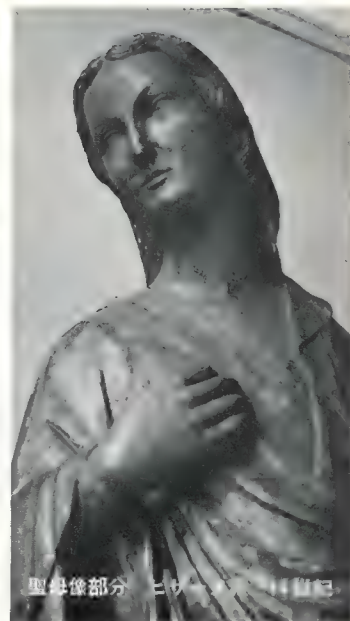
柱頭彫刻　12世紀中

中世および近世彫刻室は、ルーヴル美術館の中央部からは離れて、西南に特別の入口があるので、その存在に気がつかぬ人も多く、いつ来ても静かだ。それにここにある彫刻はそう珍しいものではなく、その同類はフランス各地で見られる。つまり我々はここでやっとフランス美術の世界に入ったのだ。そこで例えば中世美術に堪能しようと思えば、むしろ近くのノートル・ダーム大聖堂へ行った方がよい。ここでは実際の作品が生きたままその役を務めているからだ。しかしルーヴルでそれを見ることにも幾つかの利点がある。たとえば、ここでは異質の文化に属する美術との比較ができるし、また中世美術の各流派の比較もできる。比較は何よりも本質の理解を深めるものだ。まずロマネスク室に入ると、我々は、十一、二世紀の西欧に燃え上ったキリスト教彫刻家達の熱情、過去の模倣や再生ではない純粋な創造意欲を、感じとることができるが、この素朴な若々しさは、ギリシャのアルカイック彫刻のそれに通ずるものがある。

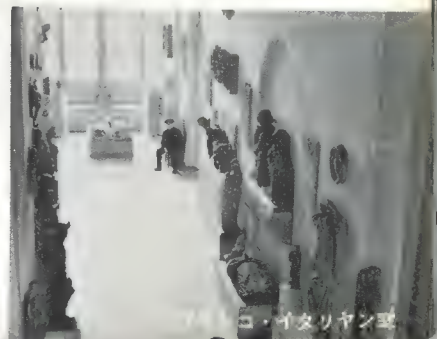
12世紀前

1165年頃

柱頭彫刻

有翼怪獣　12世紀前半

世紀前半

聖母像部分

ロマネスク室からゴシック室へ進むと、ギリシャのアルカイック室からクラシック室へ入ったときの印象が甦える。ここでは造形エネルギーの源泉は本能、空想、直観といったものではなく、知的に整理された心情であり、節度のあるヒューマニズムである。そしてさらに、これは古代クラシック美術には認められぬ深い宗教感情である。

イタリヤン室

聖母子像　フィレンツェ派

中世彫刻室のあとにルネッサンスおよび近世の彫刻室が続き、中には有名なミケランジェロの「奴隷」やジャン・グジョンの「ディヤナ」などがある。しかし中世彫刻室からここへくると一般にあまり見映えがしない。ギリシャ―エジプト―メソポタミヤ―中世と、それぞれの時代の芸術的独創の大業に心打たれながらこの室に入ると、我々は何となく、この道はいつか来た道という感じをもつ。つまり古代ギリシャ・ローマ(特にヘレニスティックおよびローマ様式)の室が思いだされるのである。かくてルネッサンスおよび近世古典主義時代の独創性について幾許かの疑問を感じながら、二階の絵画部へ上る。そこへは中世彫刻室からも小さい階段を通って上れるが、普通は中央部に戻り、サモトラケのニケ像のある階段から上る。

ミケランジェロ作　奴隷

➡ 聖痕を受ける聖フランチェスコ　ジョット作

同上　細部

同上　細部

サン・ロマーノの戦い　ウッチェルロ作

フランソワ一世(十六世紀)時代以来約四世紀にわたって続いているここの絵画の蒐集はすばらしい。最初に十四世紀から十五世紀前半にいたるイタリヤ絵画があり、ジョットの名作などが直ちに目をひく。しかしそれらの中にあって「聖母子」の小品(三七頁)が不思議に目についた。作者不明だが、平安朝の仏画などのもつ宗教的深さがあり、これは中々の傑作だった。

ウッチェルロを模写する人

大画廊へ出る。幅一〇米に長さ二七五米というその桁外れの大きさには全く度胆を抜かれる。北側にはヴェネーツィヤ派と北イタリヤ派、南側にはフィレンツェ派、ウンブリヤ派、ロンバルディヤ派と分けられているが、こう沢山並んでいては混沌とした印象しか受けない。世界的名作も何となく見映えがせず気の毒なことである。見物人は見ないうちから疲労を感じ、つい足速になってしまう。パリ近代美術館の現代絵画の巧みな陳列法にくらべると、ここのは全く旧式で拙劣だと思うが、旧王宮の構造を尊重する建前上やむを得ないのだろう(これまでもそののっぺりとした構造の単調さを破るために、内部改装にさまざまの苦心が加えられたという)。この大画廊の中央北部には、ヴェロネーゼの大作「カナの婚宴」その他ヴェネーツィヤ派のものが集められている一室がある。

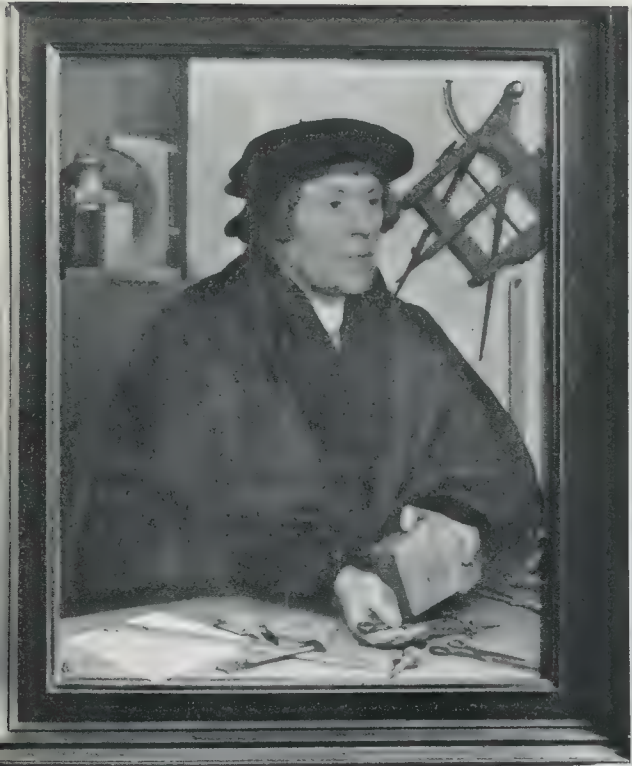
こじき　ブリューゲル作

明るいイタリヤ派の絵が大画廊を華やかに占めているのに対し、その西奥には幾つかの小室があり、フランドル派その他北欧系の作品が落着いた光線を受けている。この場所はいかにもその絵の様式にふさわしい。これら北欧系の近代絵画の出発点であるフランドル絵画を見ると、鏡で実物を映したような緻密な写実様式の背後に、イタリヤ絵画にはほとんど認められない強い精神的緊張感と深い神秘感情がしみこんでいる。見る者の心を画面の奥深くに引入れる力がある。ヴァン・アイクにより完成された油絵技法も、この様式を可能にしたのである。ボッス、ブリューゲルといった庶民的な幻想に富む絵画がルーヴルに少いのは淋しい。

ニコラス・クラッツァー像　ホルバイン作

クレーヴのアンヌ像（部分）・ホルバイン作

ヴィナス　クラナッハ作

少女像　クラナッハ作

自画像　デューラー作

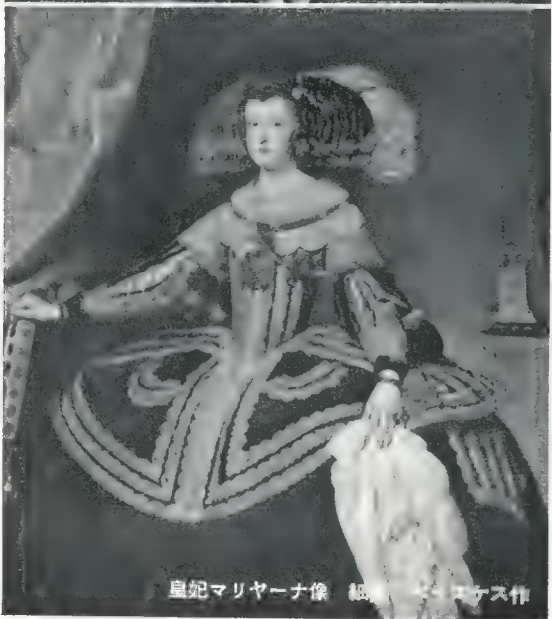
フランドル絵画の写実主義に続きながらも、ドイツの近代初期絵画には北方的な厳しさ冷たさが感じられる。その肖像画を同じ頃のフランスのもの（五〇頁）と比較すると、それがよくわかる。クラナッハのヴィナスや少女像はイタリヤ的な豊満な肉体の美女とは縁遠い。ゴシック的写実主義の残りが、ここではいささか不気味でさえある。デューラーの有名な肖像画（一四九三）を見る。彼は一四七一年の生れだからこれは二十二歳頃の作だろう。しかしそのような若者の肖像とは思われぬ厳しい表現だ。ホルバインの肖像画の方は、イタリヤニズムでかなりヒューマナイズされている。

メディスィス室(リューベンス室)

マリー・ド・メディスィスの上陸 細部 リューベンス作

フランドル派後期の雄リューベンスは、長さ四五米幅一五米高さ一三米という大室を独占している。ここにならぶ二十余枚の大連作「マリー・ド・メディスィスの生涯」は本来リュクサンブール宮に描いたもの(一六二二―一六二五)で、それが一八一五年にルーヴル美術館に移されたのである。圧倒的な威容だが、すべての大画面がリューベンス一流の

キリストの磔刑 細部 グレコ作

皇妃マリヤーナ像 細部 ベラスケス作

演劇的な口調でまくしたてている感じで、陳列室の中央に暫く腰かけていると、この大画家の芸術に少からず鈍感になってしまう。スペイン派は大画廊の東隣りのサロン・カレ(方形広間)を占めている。ここではグレコからゴヤにいたる代表的なこの派の画家達の作品が一応揃ってはいるが、数が多くないのでいささか淋しい。

十七世紀のオランダ派の絵画の室では我々は異常な静寂を味わう。この派の芸術は時代的地理的に近い筈のリューベンスの芸術とどうしてこのような隔りを示しているのだろうか。フランス・ハルスではまださほどでもないが、レンブラント、レュスダールからフェルメールにいたり、オランダ派特有のレアリスムが完成されている。これらの画家は、この世の現実に静かな光をあてて、その内奥をじっと見つめていたのだ。このような態度は現代人にとって甚だよい教訓であろう。

16世紀の肖像画　フランス派

ルーヴルにはさすがにフランス絵画は実に豊富にある。その大部分は三階にあるので、見物人の足は一、二階でくいとめられてしまい、ここにはあまりこない。本当は、ここへ来る前にシャイヨー宮の中世フランス壁画模写美術館を見てくると順序がよいのだ。

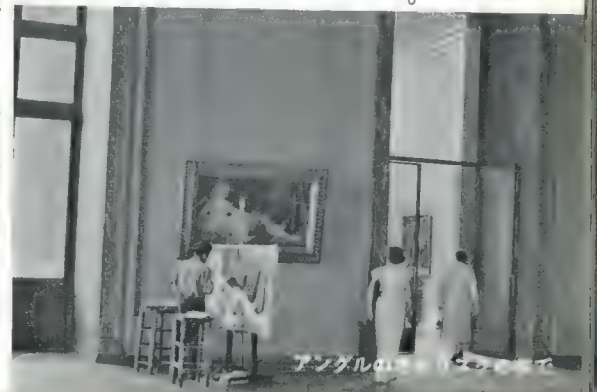
ルブラン母娘像　ヴィジェ・ルブラン作

フランスの近世絵画は、アヴィニョンのピエタ(十五世紀)に見られる中世的神秘主義、十六世紀のクルエ一派の肖像画における写実主義を通り、プッサンやクロード・ロランのイタリヤ的洗練を経て十八世紀に入ると、百花繚乱の華やかさだ。これはルーヴル宮そのものと一体をなす芸術なのである。我々はこの美術館で、この時代の絵に囲まれていると、ルイ王朝の華麗な文化を或程度実感することが出来る。しかしまた、この優雅な女性的な貴族社会の美術は、たとえばエジプト美術などのように、我々とは縁遠い社会の所産という感じもしないではない。

画家の家族　部分　ラルジリエール作

泉　アングル作

アングル室

我々の感じるそういう縁遠さは、ルイ王朝時代と現代の社会構造の差からくるのだなどと簡単にはいえない。フランス革命以後も、そしてつい最近まで、プッサンやヴァットーなどの古典趣味が一般の美術愛好家を支配していたからだ。しかし現代人の美術に対する見方はひと昔前より遥かに広くなっている。これは一つにはルーヴルのように、あらゆる時代のあらゆる様式を見せてくれる美術館のおかげであり、また過去に拘泥せず新しい感覚の作品を創造していく現代美術家達が民衆の感覚を新鮮にしてくれるからでもある。そこでたとえば、この古典主義を十九世紀に入って再興したアングルの名作「泉」や「オダリスク」の前にたたずむ人々は、一体何を思うのだろうか。その知的な構成には一分の隙もない、この形体は完璧だ、と讃嘆する人がいるだろう。またその色彩の冷たさに反感をもつ人もいるだろう。自由な批判は新しい創造を促す。こうしてアングルの活動していた時代に、彼やルイ・ダヴィッドの奉ずる古典主義に反抗して起ったのが、ロマン派なのである。アングルの作品の性格はロマン派の出現をよく理解させる。

メデューズ号の筏　ジェリコォ作

サルダナパルの死（部分）ドラクロワ作

真珠の女　コロォ作

カステルガンドルフォ　コロォ作

ドラクロワはジェリコォ等と新しいロマン派の運動を起したが、彼はそのためにルーヴルへ通ってヴェネーツィヤ派やリューベンスに学んだというのは注目すべきことだ。十九世紀以後のフランス絵画の発達にルーヴル美術館はどれだけ役立ったことだろう。そこで見られる過去の美術の多様性は、現代美術の多様性の源泉になったのではないか。

画家のアトリエ（部分）クールベ作

オランピア　マネ作

ムラン・ド・ラ・ギャレット
ルノワール作

静物　セザンヌ作

コルドヴィルの藁葺の家
ゴッホ作

印象派の絵は、平常はルーヴル宮の西すぐ近く、テュイルリー庭園の隅の通称ジュ・ド・ポーム(又は印象派美術館)にある。最近その建物の修理のため、印象派の名作がルーヴル宮の一隅に臨時に陳列された。印象派の絵は日本にもかなり来ており我々にもなじみが深いが、さすが本場のしかも中央のコレクションだけあって名品ぞろいだ。十九世紀前半までの絵とくらべると、ものの色や形が段違いに溌溂と躍動していて、印象派のもつ歴史的意義がはっきりと感じられる。印象派に引続く二十世紀の絵画は、更に絵画史を大きく転換させたわけだが、それを知るには、ルーヴルの西方ほど遠くない近代美術館へ行かねばならない。

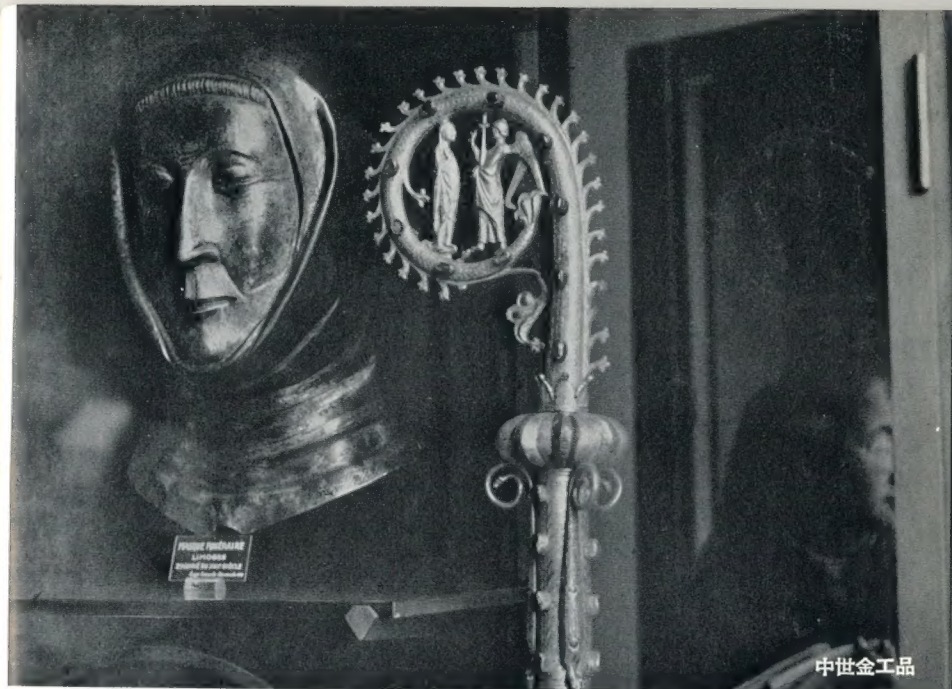
中世金工品

壁掛綴織 16世紀

聖母の戴冠 14世紀

イタリヤ陶器 15，6世紀

シャルルマーニュ遺物器 1170年頃

ナポレオン一世の王冠 19世紀

しかしルーヴルを去るにはまだ早い。見るものが沢山残っているからだ。方形広場を囲む建物の二階全部(そのうちの南側を占めるエジプト室および古代陶器の人形室は既に見た)およびアポロン室にある工芸品がそれである。工芸品とておろそかにするなかれ、これは絵画、彫刻、そして時には建築をもまじえた綜合芸術であり、材料や技法の変化ともども、我々につきせぬ興味を与えてくれる。たとえば金工品のごとき、聖者の遺物容器から王冠にいたるまで、多くは金銀等の貴重な材料を用い、時代の芸術の粋を結集した作品である。壁掛綴織は、壁画に代るものとして中世から近代初期にいたって極めて重視された美術だった。しかしそれらとても材料貴きがゆえにすぐれた美術品とはいえない。アポロン室に並んでいる歴代の国王の冠は、いつも数多い見物人を集めているが、彼等はむしろその歴史的由緒又は金銭的価値に興味をもって集まるのだ。我々はもっと素朴なものの中に虚飾も媚態もない健康な美を見出すことがよくある。たとえば、イスラム美術の室にあるペルシャ系の陶器の中には、すばらしいものが少くない。そういった知られざる傑作にじっと目を止めている人に出会うのは、二重の喜びというものだ。

鉢 シリヤ又はエジプト製 12世紀

入口で

これで一通り見終った。どれだけ時間がかかったかときかれると困る。半日ともいえるし丸一日ともいえる。それよりも見るという言葉から定義してかからねばならない。それは閲兵式の兵士を見る司令官のように、機械的に冷たい視線を向けることではない。それは愛することであり理解することである。こうして一体の彫刻でも一枚の絵画でも、時には時間を超越して我々の心を惹く。ルーヴルは行く所ではなく通う所である。

出口には大きな売場がある。安い絵葉書もあり、絵の色刷り複製や彫刻の模作も沢山並んでいる。しかし肝心のカタログが整っていないのは一寸解せない。所蔵品があまりにも多く、整理しきれないのだろうが、もちろんいずれよいものが出るのだろう。美術館から出てきた者は、誰でも新鮮な印象を固定化すべく、売場で気に入った作品の絵葉書や複製を買いあさる。しかしともかく一番よいスヴニールは心の中にある。特定の作品の美しさを強く心に焼付けて帰る人もいようが、ともかく五、六千年にわたって発展した人類美術史の流れの広さと深さは、ルーヴルを去る人の胸にいつまでも強い印象を残すことだろう。

切符売場

売　店

同　上

岩波写真文庫目録

1* 木綿
2 昆虫
3* 南氷洋の捕鯨
4* 魚の市場
5 アメリカ人
6 アメリカ
7 雪の結晶
8 写真
9 レンズ
10* 紙
11 蝶の一生
12 鎌倉
13 心と顔
14 動物園のけもの
15 富士山
16 積雪
17 いかるがの里
18 鉄
19* 川―隅田川―
20 雲
21 汽車
22* 動物園の鳥
23 様式の歴史
24 銅山
25 スイス
26 スキー
27 京都―歴史的にみた―
28 力と運動
29 アメリカの農業
30 アルプス
31 山の鳥
32 奈良の大仏
33 尾瀬
34 電話
35 野球の科学
36 星と宇宙
37 蚊の観察
38 長崎
39 高野山
40 正倉院（一）
41 彫刻
42 仏像
43* 化学繊維
44 蛔虫
45 野の花―春―
46 金印の出た土地
47* 東京―大都会の顔―
48* 馬
49* 石炭
50 桂離宮と修学院
51 日光
52* 醤油
53 文楽
54* 水辺の鳥
55 米
56 正倉院（二）
57* 石油
58 千代田城
59 歌舞伎
60 高山の花
61* 波
62 京都御所と二条城
63 赤ちゃん
64* オーストラリア
65* ソヴェト連邦
66 能
67* 造船
68 東京案内
69 平泉
70 手術
71 宮島
72 広島
73 佐渡
74 比叡山
75 阿蘇
76 信貴山縁起絵巻
77 針葉樹
78 近代芸術
79 日本の民家
80 季節の魚
81 シャボテン
82 新劇
83 郵便切手
84 かいこの村
85 伊豆の漁村
86 奈良―東部―
87 奈良―西部―
88 ヒマラヤ
89 上高地
90* 電力
91 松江
92 動物の表情
93 金沢
94* 自動車の話
95 薬師寺・唐招提寺
96 日本の人形
97* システィナ礼拝堂
98 美人画
99 日本の貝殻
100 本の話
101 戦争と日本人
102 佐世保
103 ミケランジェロ
104 空からみた大阪
105* 宗達
106 飛騨・高山
107 ゴッホ
108 京都案内―洛中―
109 京都案内―洛外―
110* 写楽
111 熊
112* 東京湾
113 汽車の窓から―東海道―
114 地図の知識
115 姫路
116 硫黄の話
117 伊勢
118 はきもの
119 隠岐
120 源氏物語絵巻
121 農村の婦人
122 出雲
123* アルミニウム
124 水害と日本人
125 日本のやきもの
126* 貝の生態
127 イスラエル
128 伴大納言絵詞
129 瀬戸内海
130 飛鳥
131 聖母マリア
132* 日本の映画
133 能登
134 山形県
135 福沢諭吉
136* 利根川
137 鹿児島県
138 伊豆半島
139 日本の森林
140 高知県
141 チェーホフ
142 仏教美術
143 一年生
144 長野県
145 塩原
146 日本の庭園
147 木曽
148 忘れられた島
149 近東の旅
150 和歌山県
151 函館
152 豆
153 大分県
154 死都ポンペイ
155 富士をめぐる―空から―
156 神奈川県
157 柔道
158 戦争と平和
159 ソ連・中国の旅―桑原武夫―
160 伊豆の大島
161 ジョットー
162 熊野路
163 鳥獣戯画
164 愛媛県
165 やきものの町
166 冬の登山
167 埼玉県
168 男鹿半島
169 フランス古寺巡礼
170 滋賀県
171 白浜
172 東京国立博物館
173 千葉県
174 箱根
175 細胞の知識
176 四国遍路
177 村の一年―秋田―
178 セザンヌ
179 石川県
180 琵琶湖
181 仏陀の生涯
182 香川県
183 日本 -1955年10月8日-
184* 練習船日本丸
185 悲惨な歴史―ドイツ―
186 ボッティチェリ
187 東海道五十三次
188 離された園
189 松島
190 家庭の電気
191 アメリカの地方都市
192 五島列島
193 塩の話
194 パリの素顔
195 横浜
196 日系アメリカ人
197 インカ
198 奈良をめぐる―空から―
199 子供は見る
200 雪舟
201 東京都
202 アフガニスタンの旅
203 渡り鳥
204 群馬県
205 ブラジル
206 ルーヴル美術館
207 北海道（南部）
208 小豆島
209 日本 -1956年8月15日-
210 富山県
211 毛織物の話
212 北海道（東・北部）
213 自然と心
214 空からみた京都
215 世界の人形
216 愛知県
217 諏訪湖
218 鉄と生活
219 山口県
220 叐積山
221 北京
222 江南
223 四川
224 広州―大同
225 室蘭
226 山水画
227 三重県
228 白山
229 鵜飼の話
230 島根県
231 小さい新聞社
232 北海道（中央部）
233 近代建築
234 岡山県
235 ねずみの生活
236 札幌
237 日本 -1957年4月7日-
238 広島県
239 北陸路
240 倉敷
241 ギリシアの神々
242 長崎県
243 水郷―潮来―
244 福井県
245 秋吉台
246 子供の絵
247 徳島県
248 十勝平野
249 岐阜県
250 青森県
251 中国の彫刻
252 熊本県
253 秋田県
254 苫小牧
255 山梨県
256 新潟県
257 村と森林
258 茨城県
259 福島県
260 旭川・大雪山
261 大阪府
262 奈良県
263 北アルプスの山々
264 地形の話
265 静岡県
266 軽井沢
267 佐賀県
268 日本の社寺建築
269 宮崎県
270 十和田湖
271 福岡県
272 日本―1958年正月―
273 宮城県
274 鳥取県
275 タイ -学術調査の旅-
276 インドシナの旅
277 栃木県
278 屋久島・種子島
279 岩手県
280 地中海の史蹟めぐり
281 兵庫県
282 キリスト
283 京都府
284 インドの一断面
285 沖縄
286 風土と生活形態

*印は品切でございます

モナ・リザをみる人々

¥ 100